

# オースティンとセンシビリティー

金子 弥 生

## Austen and Sensibility

Yayoi Kaneko

### Abstract

The work of Jane Austen came between 1813 and 1818, which placed her novels in the Regency period. Different from the Victorian era, it was full of openness, candor, and satire. In addition, sentimentalism is one of the characters of the novels in this era and sentimental novels, where the emergence of feeling is considered as a guide to behavior, are popular. Generally, her work is considered refined, but it is affected by the era. One of her juvenilia, *Love and Freindship*, which is an epistolary novel, is not elegant but full of Austen's critical spirit. Austen, though fourteen when she wrote it, tried to attack the public tendency to regard sensibility as important.

ジョージ三世 (George III, 在 1760-1820) の時代, イギリスは大きく変化した。産業革命が起きたのである。1764 年の紡績機械, 1765 年の蒸気機関, 1769 年の水力紡績機の発明, そして 1814 年の蒸気機関車走行の成功を受け, 農業国であったイギリスは, 工業国へと移行してゆく。<sup>1</sup> 農村から工場のある都市へと人口は流出し, 人々の生活スタイルも変化した。食料品や生活用品の販売が開始され, 例えば今まで自宅で作られていた石鹼は店頭で購入できるようになった。その結果, ジェントリーや新興中産階級の女性たちは自由な時間を持てるようになったのである。自由な時間を読書に充てる女性が出現したことは, ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の小説出版にとっては好条件であったと言えるだろう。

オースティンの小説といえば上品という印象を持たれがちである。だが, 彼女の小説が出版されたのはいわゆる<sup>リージェンシー</sup>摂政時代 (1811-1820) と呼ばれる時代であった。摂政時代はその後に続く体裁主義でお上品なヴィクトリア朝時代とは対照的で, 何事にもオープンであり, 奢侈の時代だったのである。

本論では, オースティンの習作には彼女が愛読した当時流行りの感傷小説の影響を受けながらもそれに浸りきることなく, 批判精神がすでに芽吹いていることを『愛と友情』(*Love and Freindship* [sic], 1790) で究明し, また摂政時代という時代がその後の彼女の小説に影響を与えたことを考察する。

## 1. オースティンとセンシビリティー

オースティンの『初期習作集』(*Juvenilia*) は, 11 歳から 17 歳の間に執筆されたと考えられており, 彼女の手書き原稿が 3 冊のノートに残されている。それぞれのノートには 1 巻, 2 巻, 3 巻と記され, 『愛と友情』は 2 巻目に記された書簡体小説である。オースティンは幼いころから父の豊富な

蔵書を読み、小説に親しんでいた。彼女が強く影響を受けた作家の1人に、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) がいる。リチャードソンはイギリス初の書簡体小説『パメラ』(Pamela, 1740) を書いた作家である。

リチャードソンは、手紙のお手本を書いてほしいという依頼を受け、自分の状況を知人に知らせる手紙を書くことにした。こうして完成したのが、書簡体小説『パメラ』である。これは主人公パメラが奉公に行ったお屋敷の息子に誘惑されるが、その危険をかわし、最終的にはその息子に正式にプロポーズされる、という話である。彼女は身に迫る危険を逐一手紙にしたため、両親や知人に送る。危険がすぐそこに迫っているのに手紙を書く、という不自然さに現代の読者なら苦笑してしまう状況ではあるが、当時の読者はパメラに感情移入し、主人公とともにスリルを味わい、パメラを生きた人物として感じていたのである。書簡という手法を用いて読者の感受性を掻き立て人気を博した。

オースティンの時代に大人気で、彼女も愛読していたファニー・バーニー (Fanny Burney, 1752-1840) も書簡体小説を書いた。オースティンは書簡体小説の流行に倣って『愛と友情』を書き上げたが、そこには単なる形式上の模倣ではなく、彼女の今後の小説の指針となる信条が読み取れる。

感傷主義の時代といわれた18世紀、博愛主義的行為や寛大にも流す涙が慈悲表現と考えられていた。また、この時代に書かれたいわゆる感傷小説には、大げさな言葉使い、残酷な両親、反対される恋人たちが「お約束」として現れる。『愛と友情』も同様である。主人公ローラが身の上を友人の娘に語る手紙で物語は展開してゆく。ローラは結婚に反対していた夫エドワードの父から、年400ポンドを生活費として受け取り何不自由なくスコットランドに住んでいるという設定である。

まず、ローラが自身について語る手紙を見てみよう。

My Father was a native of Ireland and an inhabitant of Wales; my Mother was the natural Daughter of a Scotch Peer by an Italian Opera-girl — I was born in Spain and received my Education at a Convent in France.<sup>2</sup>

ヒロインの異国情緒あふれる出生は、当時流行の小説の特徴を示しているが、<sup>3</sup> ここには国の名前が列挙され、全く実体が欠如していると言わざるを得ない。<sup>4</sup> また、自らを「私生児」(natural) と言っているが、これは当時の小説ではタブーとされた事柄であった。こうした要素を何気なく取り入れるあたりからは、オースティンの物語展開がかなり大胆であることが読み取れる。

自らの生まれを恥じることなく語るローラは、次に自分は外見も内面もすばらしいと続け、次のように語る。

A sensibility too tremblingly alive to every affliction of my Friends, my Acquaintance and particularly to every affliction of my own, was my only fault, if a fault it could be called.

(104. underlining mine.)

感傷小説で重視される「センシビリティ」が、ここで強調される。行動の指針は感情表現であり、感情移入するのが洗練された振る舞いと考えられていた時代、つまりセンシビリティが重視されていた時代に、オースティンは意識的に、ヒロインをセンシビリティのことさら強い人物に設定している。

ローラは、父親に勧められた結婚を断り家出していたエドワードと偶然出会い、30分後には結婚

してしまう。<sup>5</sup>

では、この2人の結婚をエドワードの家族はどう感じたのだろうか。ローラがエドワードの妹オーガスタと偶然にも引き合わされる場面は次のように描かれている。

There was a Disagreeable Coldness and Forbidding Reserve in her reception of me which was equally Distressing and Unexpected. None of that interesting Sensibility or amiable Simplicity in her Manners and Address to me, when we first met which should have Distinguished our introduction to each other —. Her Language was neither warm, nor affectionate, her expressions of regard were neither animated nor cordial; her arms were not opened to receive me to her Heart, tho' my own were extended to press her to mine. (110)

エドワードが結婚したことを初めて知ったオーガスタは、ローラとの対面に際して「心からのことば」をかけることはない。一般に、その場で兄の結婚を知らされ、新妻に引き合わされた場合、瞬時に打ち解けあい、親愛の情を示すことはまずない。だが、オーガスタの感受性に欠けた行為は、ローラにとっては自分に対する愛情を抱いていないとしか理解できず敵意を抱かせるに充分だった。換言すれば、感受性の欠如イコール「残酷」であるとローラは考えてしまっている。ローラのすべての判断基準は、感受性の有無によるのである。

その後、2人は「残酷」なエドワードの家族の元を離れ、エドワードの親友オーガスタを訪ねる。その妻、ソフィアはローラに劣らず感受性と細やかな心とに満ちあふれる人物であった。

Sophia was rather above the middle size; most elegantly formed. A soft Languor spread over her lovely features, but increased their Beauty —. It was the Characteristic of her Mind —. She was all Sensibility and Feeling. We flew into each others arms and after having exchanged vows of mutual Friendship for the rest of our Lives, instantly unfolded to each other the most inward Secrets of our Hearts —. (113-114. underlining mine.)

感受性豊かな2人は、会うとすぐに意気投合し、秘密を共有するほどの親友になってしまう。

一方、エドワードとその親友オーガスタの再会の場面は、互いに“My Life! my Soul!” “My Adorable Angel!” (114) と叫びながら抱き合う、という感動的なものである。この再会の場面を目にしたローラとソフィアは感動のあまり「気を失って、代わる代わるひとつのソファに倒れ込む」(114) のだった。2組の夫婦の繊細な感受性はことさらに強調され、彼ら以外の登場人物はすべて冷たさと敵意にあふれた「残酷」な人物として描かれていく。

感受性豊かな4人は共に生活することになるが、その生活費の出所が普通ではない。オーガスタが父親から盗んできた金銭を使用するのだ。感受性豊かな彼らは不思議なことに、盗んだ金銭を使用することに全く罪悪感を抱かない。

They [Augustus and Sophia] had been married but a few months when our visit to them commenced during which time they had been amply supported by a considerable Sum of Money which Augustus had gracefully purloined from his Unworthy father's Escritoire, a few days before his union with Sophia. (116)

オーガスタ夫婦にローラたちが加わったため、出費はかさみ、すぐに金銭は不足し始める。しかし彼らは「金銭的な苦しさに合わせて生活することを潔しとせず、借金した金を返すことは恥」

(116) とした。この態度にローラは深く感動する。一般に「罪」と見なされる行為を平気でいい、その償いをするには「恥」とする思考は、常識では受け入れがたい。感受性豊かな4人に共通した普通ではない価値観が示されることで、読者は彼らが非難するエドワードの父親を始めとする人物が、実際は常識的な考えの持ち主であることに気づかされる。

当然の事ながら、オーガスタスは窃盗の罪で逮捕され、エドワードは親友の様子を見にロンドンへ赴く。なかなか戻らぬ夫たちの消息をつかもうと、ローラとソフィアも旅に出る。彼女たちは、今まで同様、両親、親戚、知人の家に居候し、盗みを働きながら暮らし続ける。他人の金銭を盗み、自分たちの生計に充てることを当然と考えているからこそその行為である。つまり、感受性豊かな自分たちは「精神的な存在であると信じ、現世の物質的なことから超越している」<sup>6</sup>と2人は勝手に考えているのである。換言すれば、人並み優れた感受性を持つ自分たちは、感受性が欠如した人物より優れており、彼らの家に居候し、その金銭を盗むのは当然というのである。この驚くべき理屈をパロディー化して描写するオースティンには、すでに他人をある程度の距離をおいて観察するという態度が身についていたと言えるだろう。その後もローラたちは自分たちの高い精神性という優越性を示すために、ことあるごとに失神し続ける。

その後、2人が夫たちを捜しあぐねて木陰で休んでいると、目の前で馬車が転覆する。見ると2人の男性が馬車から投げ出されて血まみれになって倒れている。彼らは彼女たちの夫であった。そのときの2人の様子は次のように描写されている。

Sophia shrieked and fainted on the Ground — I screamed and instantly ran mad — . We remained thus mutually deprived of our Senses, some minutes, and on regaining them were deprived of them again — . For an Hour and a Quarter did we continue in this unfortunate Situation — Sophia fainting every moment and I running Mad as often — . (129)

繊細で感受性豊かな彼女たちにとってはとうてい耐えられない状況を目にして、1時間15分もの間ソフィアは悲鳴を上げては気絶、ローラは気が狂うという行為を繰り返していた。その間、夫たちは何の手当ても受けられずに放置されていた。2人が気絶し気を狂わせていた間、エドワードはまだ生きていた。しかし、結局2人とも死亡してしまうことになる。自分たちが気絶し、気を狂わせ続けていたとはいえ、もしすぐに手当てをしていれば、夫たちは一命を取り留めたかもしれない。しかし、彼女らはそんなことを一向に考えもしなければ、悔やみもしない。現実には立ち返り夫たちを手当てするよりは、自分たちの豊かな感受性を示すことに満足していたのであり、それで優越感に浸っていたのである。

エドワードが死亡したのを知ると、ソフィアは再び気絶した。結局、彼女は、長時間気絶したことが原因で、病気になり、命を落としてしまう。彼女は次のような最後のことばを残し、絶命する。

“...Beware of fainting-fits...Though at the time they may be refreshing and Agreeable yet believe me they will in the end, if too often repeated and at improper seasons, prove destructive to your Constitution...My fate will teach you this...I die a Martyr to my greif for the loss of Augustus... One fatal swoon has cost me my Life...Beware of swoons Dear Laura.... A frenzy fit is not one quarter so pernicious; it is an exercise to the Body and if not too violent, is I dare say conducive to Health in its consequences — Run mad as often as you chuse; but do not faint — .”

(132-133)

豊かすぎる感受性が命の危機にもつながるとは、なんとも皮肉でもあり同時に滑稽でもある。14歳のオースティンは、感受性をすばらしいものと強調する世相に対し、程度を超えた極端な感受性の危険性を『愛と友情』でパロディー化しながら、批判する。彼女の父親は、オースティンの兄たちの友人を下宿させ、勉強を教えていた。彼女は幼いころから兄たちおよびその友人から、女の子が普通受ける教育とは異なる雰囲気を感じ取っていたであろう。彼らが話題にすること、また、大学生であった兄から聞く話に耳を傾け、オースティンは世間の流行をそのまま受け入れるのではなく、自分なりに判断する態度を身につけたのではないだろうか。塩谷氏が指摘するように、オースティンは創作活動初期段階から当時流行していた小説の影響を受けつつも、同時に批判的な視点を持っていたのである。<sup>7</sup>

## 2. オースティンの主要作品

19世紀といえば、ヴィクトリア朝時代と考えがちであるが、実際にヴィクトリア朝時代が始まったのは1837年のことである。この時代には、「結婚」をテーマとした女性の生き方に焦点を当てた小説が多く出版された。オースティンの代表6作品は、1811年に出版された『分別と多感』(*Sense and Sensibility*)から1817年の死後出版の作品、『ノーサンガー寺院』(*Northanger Abbey*)、『説得』(*Persuasion*)まですべてが19世紀の中でも摂政時代と呼ばれる時代に出版されている。同じ19世紀ということで、彼女の小説はヴィクトリア朝時代に書かれた上品な作品と同様、上品であると思われがちである。実際、オースティンの作品にはヒロインが肉体的に傷つけられるようなきわどい描写は全くない。道徳的には安心して読める作品であり、これが「上品」と思われる要因の1つとも考えられよう。

オースティンはジョージ三世の統治下で生涯を終えた。ここでジョージ三世の治世を瞥見したい。ジョージ三世は血統とも言うべき数々の不品行で有名なハノーヴァー王家出身の国王であったが、典型的イギリス人と言われるほどイギリス人らしい国王であり、しばしば精神に異常をきたしたにもかかわらず、生来の正直さ、勇気、私生活の清廉さから国民には人気があった。9男6女に恵まれたが、息子たち、特に皇太子ジョージ・オーガスタス・フレデリック (*George Augustus Frederick*)、後のジョージ四世 (*George IV*, 在1820-30)の行状は目に余るものがあった。

ジョージ三世はヘモグロビン生成機能不全が原因のポルフィリン病という珍しい病にかかり、しばしば精神異常を繰り返し、1804年には4度目の精神異常に陥った。その後、何とかもちなおしたが、1811年には重度の異常状態に陥り、王としての役割を果たすのは絶望的となった。そこでこの年から1820年の国王の死まで、皇太子が摂政を務めることになった。この10年間は摂政時代と呼ばれている。

皇太子は国民から大変に不人気であった。1830年、彼が国王として亡くなったとき、国民が悲しみに包まれることはなかった。優雅で教養豊か、人当たりがよかった反面、女性関係や贅沢な生活、放蕩三昧に国民は嫌気がさしていたのであろう。例えば、美術品収集、オペラ鑑賞、観劇、洋服、装飾品などに金銭をつぎ込み、愛人にはプレゼントを欠かさなかった。4歳年上の愛人で俳優メアリー・ロビンソン夫人 (*Mary Robinson*, 1758-1800)へのプレゼントを借用証や手形で購入し、1784年にはその借金は10万ポンドになっていた。こうした浪費がたたり、ついには借金は最高で64万ポンドにも上ることになるのである。国王の年間の宮廷費が83万ポンドであったのと比較すれば、ジョージ



四世の浪費の程度は明白である。<sup>8</sup>

1784年、6歳年上の未亡人のフィッツハーバート夫人 (Maria Anne Fitzherbert, 1756-1837) を見初めた皇太子は、彼女に執拗に結婚を迫った。しかし良識ある彼女に結婚を拒否されると、自殺まがいの騒ぎを起こし、ついに夫人に結婚を承諾させるに至った。フィッツハーバート夫人との同棲後も浪費は続き、1793年、借金は40万ポンドに及んだ。<sup>9</sup> 皇太子がこうした浪費三昧の日々を過ごしていたころ、オースティンは習作を次々と執筆していったのである。彼女の作品に、私生児や窃盗といった大胆な描写が見られるのも、時代の反映と言ってもよいだろう。

この年、7人いた国王の王子たちは誰一人として結婚していなかったが、未成年の七男を除き全員が愛人と関係を持っていた。そして皇太子はすでに31歳であったにもかかわらず、結婚話に耳を傾けることはなかった。王位継承の問題を考慮した国王が、借金を棒引きにするという交換条件で結婚を持ちかけると、皇太子はあっさり承諾した。こうして1795年、皇太子はフィッツハーバート夫人との関係を絶ち、ブランシュヴァイク・ヴォルフインビュッテル公カール・ヴィルヘルムの次女、キャロライン (Caroline Amelia Elizabeth of Brunswick, 1768-1821) と結婚した。異常な肥満体である皇太子と大の風呂嫌いで異様な体臭を漂わせていたキャロラインは、結婚式で初めて出会った。2人は、互いに相手に幻滅を感じたのであろう、1796年、長女シャーロット誕生の3ヵ月後、別居生活に入った。<sup>10</sup>

2人の新居には、カールトン・ハウスが用意されたが、別居後、皇太子はブライトンやウィンザーへ、皇太子妃はチャールトンへ移った。その後、皇太子はフィッツハーバート夫人を愛人として公にカールトン・ハウスに迎え、はばかることはなかった。摂政時代は愛人に寛大な時代、と言われる所以である。

オースティンは8人きょうだいの下から2番目で、姉キャサンドラがたった1人の女きょうだいだった。2人は大変仲がよく、男きょうだいとは話さないような日常のこまごまとした出来事やうわさ話を楽しんだ。彼女らは1人が病弱な母の世話のために家に残り、もう1人が兄弟や友人宅に滞在することがよくあった。こうした時、2人は手紙で近況を伝え合った。当時の手紙は現代の電話やメールのような役割を果たしており、手紙はかなり頻繁に交換し合っている。ここで姉キャサンドラに送った手紙をいくつか見てみよう。

M<sup>rs</sup> Hall of Sherbourn was brought to bed yesterday of a dead child, some weeks before she expected, owing to a fright. — I suppose she happened unawares to look at her husband.<sup>11</sup>

(To Cassandra Austen, 27-28 October 1798)

ホール夫人の死産の原因が夫の姿を見たせい、と現在でもかなりきつい冗談を書き送っている。詳細は後述するが、オースティンの手紙を編集することになるヴィクトリア朝時代に生きた彼女の甥には受け入れがたい記述であったであろう。

その約半年後、今度は次のような手紙を書いている。

...at the bottom of Kingsdown Hill we met a Gentleman in a Buggy, who on a minute examination turned out to be D<sup>r</sup> Hall — & D<sup>r</sup> Hall in such very deep mourning that either his Mother, his Wife, or himself must be dead.

(To Cassandra Austen, 17 May 1799)

黒ずくめの服装をしたホール博士を見て、「亡くなったのはお母様か奥様、またはご自身」とは茶目っ気たっぷりの冗談である。オースティンは、どのような状況においても笑いを誘う要素を盛り込むことを欠かさなかった。

参加した舞踏会の報告では、次のようにしたためている。

Miss Debary, Susan & Sally all in black, but without any Statues, made their appearance, & I was as civil to them as their bad breath would allow me.

(To Cassandra Austen, 20-21 November 1800)

「くさい息が許す限り、礼儀正しく」接したとはヴィクトリア朝時代の人々からすれば、聞くに堪えない言及である。ヴィクトリア朝時代とは、女性が「脚」(leg)という単語を言うことさえはばかられ、耳にした場合は気を失うことになっていたほど上品さが重んじられた時代であったことを忘れてはならない。

オースティンの手紙は彼女の死後、キャサンドラの手であまりにプライベートな部分が削除された。電話やメールの役割を果たしていた手紙は何千通もあったと思われるが、全部で160通あまりしか現存していない。キャサンドラは、家族や親戚の病状など、個人的な部分を削ったと考えられているが、ヴィクトリア朝に生きたオースティンの子孫たちは、「はしたない」と感じられる部分を削除したり、書き換えたりしたのである。新井氏が指摘するように、1884年、オースティンの姪の息子ブレイバーン卿が出版した書簡集では上記引用の「くさい息が許す限り、礼儀正しく」という箇所は、「状況が許す限り、礼儀正しく」と書き換えられていた。キャサンドラがすでに手を入れていた手紙であるが、それでもオースティンの手紙はヴィクトリア朝時代に生きる子孫たちにとって刺激が強すぎるものだった。お上品主義のヴィクトリア朝時代の人々は、彼女の手紙に記された露骨な表現や悪い冗談を受け入れることはできなかった。そこで、不都合と感じた箇所は、それがたとえ文章の途中であれ、ヴィクトリア朝的に修正して、世に出したのである。<sup>12</sup>

さて、皇太子が摂政を務めた摂政時代で、社交界の中心だったのが、皇太子を中心とした「しゃれ男」(beau)と「色男」(buck)と呼ばれた人々であった。<sup>13</sup> 彼らはアッパークラス出身とは限らず、ミドル・クラスの人々や高級娼婦も含まれていた。彼らが入り出していたのがジョージ四世のロンドンの邸宅、カールトン・ハウスであったため、彼らはカールトン・ハウス派 (the Carlton House Set) と呼ばれた。肥満体のジョージ四世は「身だしなみに異常なほどの金と時間をかけ、持ち物一つ一つにこだわりを見せて趣味のよさを誇り、しかもきわめて社交的で、人づきあいを得意」としていた。<sup>14</sup> 彼らは高額なギャンブル、ブランデーのがぶ飲み、無駄使い、不倫を旨とし、放蕩の限りを尽くしたのであった。

ジョージ三世の「甘やかすな」という教育方針にもかかわらず、皇太子は放蕩三昧の一生を送った。これは厳格な教育方針への反発とも考えられるが曾祖父や祖父らの行状を鑑みたとき、ハノーヴァー家の血統の所業と考えられるかもしれない。<sup>15</sup> 1830年6月26日のジョージ四世崩御にあたりタイムズ紙は「親不孝者、最悪の夫、親で無し、不良の国民、悪い国王、そして悪い友。」「誰が彼のために涙を流しただろう？ 誰が心からの悲しみで心臓の高鳴りを覚えただろうか？」と記した。そして大多数の国民はこれに共感したという。<sup>16</sup>

摂政時代は、後の生真面目な女王が統治したヴィクトリア朝時代とは異なり、良く言えば自由奔放

な時代、悪く言えば放蕩と墮落の時代であった。皇太子らの生活習慣が、国民生活へも影響を与えたことは否定できない。オースティンの代表作といわれる6作品がこの摂政時代に出版されたことはすでに述べた通りである。「しゃれ男」たちの他人を省みない、自分勝手な行状が国民の不快を買ったことは、彼女の作品にも読み取れるところである。オースティンは主要作品で「自己中心的な感受性が笑いを引き起こすだけではなく、まわりの人間や本人にとっても害をもたらすという、より深刻な要素」<sup>17</sup>をも扱うようになり、小説はより複雑化する。

1811年、オースティンは『分別と多感』を出版した。<sup>18</sup> この小説のヒロイン、マリアンは感受性が強すぎる人物として登場する。父親が死亡し、今まで暮らしていた屋敷ノーランドは異母兄が相続し、夫婦で引っ越してくることになる。当然マリアンら三姉妹と母は屋敷を出ていかなければならない。長年暮らした屋敷を出るのは誰にとってもつらいことである。特にマリアンと母親の嘆きは大変なもので、毎日泣き暮らしているほどである。こうした状況下、ただひとり姉エリナはそのつらさに耐え、感受性の強い母親と妹マリアンを慰めながらも現実にも目を向け、分別を持って今後の生活を真剣に考える。

最終的に一家は住み慣れたノーランドを出て、親戚の所有するコテージに住まわせてもらうことになるが、マリアンの嘆きは人一倍激しいものだった。

“Dear, dear Norland!”...“when shall I cease to regret you! — when learn to feel a home elsewhere! — Oh! happy house, could you know what I suffer in now viewing you from this spot, from whence perhaps I may view you no more! — And you, ye well-known trees! — but you will continue the same. — No leaf will decay because we are removed, nor any branch become motionless although we can observe you no longer! — No; you will continue the same; unconscious of the pleasure or the regret you occasion, and insensible of any change in those who walk under your shade! — But who will remain to enjoy you?”<sup>19</sup>

ノーランドを擬人化し、自らの嘆きをぶつける。彼女の嘆きを表現する文章のほとんどは感嘆詞で締めくくられ、マリアンの繊細かつ強烈な感受性が表現される。

コテージに移ったマリアンは散歩で雨に降られ、足をくじいたところを紳士に助けられる。彼女を抱き上げて家まで運んでくれたウィロビーは、美男子で立ち居振る舞いもすばらしい紳士であった。彼との出会いは感受性豊かなマリアンが夢見た通りのロマンティックなものだった。マリアンはすぐに彼に夢中になってしまう。『愛と友情』のヒロインたちと同様、スピーディーな展開である。しかしマリアンには、その後ウィロビーとの行き過ぎた振る舞い、自己中心的で他人を傷つける言動が目立ち始め、二人のこうした態度は、彼女を誠実に愛するブランドン大佐を間接的に侮蔑することになる。一方、金銭重視のウィロビーは最終的に彼女を捨て、別の女性と結婚してしまう。これにショックを受けたマリアンは泣き崩れ、体調を崩し、姉を始め周囲の人々に心配をかけるが、自分が世界で一番不幸と嘆き続けて重病に陥るのだった。ここには自らの自己中心的な感受性で周りの人々をも自らの不幸に巻き込むことで、本人だけでなく周りの人間に害をもたらすという、『愛と友情』には見られなかった複雑な人間感情が描かれている。マリアンが自身の感受性は受け入れるには強すぎるものと悟るためには、自らの命を危険にさらす必要があるとオースティンは考えていたのである。

『ジェイン・オースティンとシャーロット・ブロンテの初期作品』(The Juvenilia of Jane Austen



and Charlotte Brontë) の序で、編集者ビアはオースティンの習作は主要作品を執筆する上で不可欠な作品であったと述べている。<sup>20</sup> オースティンは『愛と友情』を執筆する約10年前に、姉キャサンドラに“I cannot anyhow continue to find people agreeable,” (To Cassandra Austen, 12-13 May 1801) と書き送っている。当時流行していた感傷小説に疑問を抱いた彼女は、感受性を重んじる風潮に幼いながらも一石を投じた。こうした彼女の批判精神は、幼いころから生まれ、後年、より成熟した小説へと発展していったのである。

## 注

- 1 森護, 『英国王室史話』(東京: 大修館書店, 1986), 515.
- 2 Jane Austen, *Juvenilia*. ed. Peter Sabor. (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 104. 以下, 習作の引用はこの版による。
- 3 新井潤美, 『自負と偏見のイギリス文化: J・オースティンの世界』(東京: 岩波書店, 2008), 19.
- 4 鈴木美津子, 『ジェイン・オースティンとその時代』(東京: 成美堂, 1995), 22.
- 5 時間の極端な冗長さや物語の急展開などの時間の異常な切り詰めについては『ジェイン・オースティンとその時代』(22-23)を参照のこと。
- 6 鈴木美津子, 17.
- 7 塩谷清人, 『ジェイン・オースティン入門』(東京: 北星堂書店, 1997), 31.
- 8 森護, 525.
- 9 *ibid.*, 526-7.
- 10 *ibid.*, 529.
- 11 Deirdre le Faye ed., *Jane Austen's Letters*. (Oxford: Oxford University Press, 1995), 17. 以下, オースティンの手紙の引用はすべてこの版による。
- 12 新井潤美, 2-3.
- 13 *ibid.*, 8.
- 14 *ibid.*, 8-9.
- 15 森護, 524.
- 16 *ibid.*, 522.
- 17 新井潤美, 31.
- 18 『分別と多感』は『エリナとマリアン』(*Elinor and Marianne*) という題で書かれた書簡体小説であったが, 1797年に書き改め, 1811年に出版された(齋藤勇, 西川正身, 平井正穂編, 『英米文学辞典』(東京: 研究社, 1985), 1202. 参照のこと)。従って, 『分別と多感』においても三姉妹中, エリナとマリアンに焦点が置かれ描かれている。
- 19 Jane Austen, *Sense and Sensibility* (London: Oxford University Press, 1923), 27.
- 20 Frances Beer ed., “Introduction.” *The Juvenilia of Jane Austen and Charlotte Brontë*. (London: Penguin Classics, 1986)

(かねこ やよい 英語コミュニケーション学科)